

新竹（2）～台湾北西部の中枢



片倉 佳史（台湾在住作家）

新竹は台湾の北西部に位置する産業都市である。台北から約 60 キロ離れた場所にあり、地域の中核となっている。人口は約 45 万人となっており、近隣の広範な地域の中心となっているためか、人口以上に賑やかな印象である。前回に続き、この都市の歴史について紹介してみたい。

新竹市内を歩く

新竹（しんちく）は台湾北西部の中核として機能する都市である。台北との結びつきは強く、当然ながら両都市の往来は盛んである。新竹を訪れる際、台北から台湾高速鉄路（台湾高鉄・高鉄）を利用するのが一般的だが、高鉄新竹駅は郊外の竹北（ちくほく）市に設けられている。そのため、市街地までのアクセスを考えると、所要時間は在来線を利用する場合と大きな差はない。

台湾高速鉄路の所要時間は 30 分ほどである。ここで台鉄（在来線）に乗り換え、新竹駅までは所要 19 分となっている。高鉄と台鉄の駅は隣接しているものの、在来線の駅名は「六家」となっている。

この駅は 2011 年 11 月 11 日に開設され、隣りの内湾線竹中駅までの一駅間が六家線となっている。六家線の列車はすべて内湾線に直通し、新竹駅が終点となる。なお、在来線で台北から新竹まで移動した場合、所要時間は自強号で 1 時間あまりとなっている。

風向が考慮されていた駅前通り

日本統治時代の駅舎が風格を誇る新竹駅から市内を歩いてみよう。地図を見ると、駅の北側に市街地は広がっており、駅を中心に放射状に道路が延びている。その中で、現在は中正路と呼ばれている道路が日本統治時代に整備された駅前通りで



街の玄関口となっている在来線新竹駅。終日賑わいを見せるターミナルだ。

ある。

台湾の都市は台北をはじめ、東西南北の方角に忠実に道路配置がなされていることが多い。これは日本統治時代の都市計画によるものだが、新竹市の場合、区画整備はしっかりとされているものの、向きが北西の方向に斜めになっている。

これは風の吹く方向を意識した結果であるという。新竹は「風の町」として知られ、特に冬場に山岳部から吹き下ろす風に晒されるため、火災が多かった。これを受け、風の通りぬけを考慮し、街路の向きが決められることとなった。

確かに、駅前通りだった中正路は駅舎の正面に伸びるわけではなく、向きも曲がっている。

新竹の中心「迎曦門」

中正路を進んでいくと、突きあたりに「迎曦門（げいぎもん）」がある。大きなロータリーの中央にあり、城楼がどっしりとした構えを見せている。

清国統治時代の新竹は、城壁に囲まれた城郭都市であった。1827年から2年間の工事を経て、城壁は完成したとされている。当初は4つの城楼（城門）が設けられていたが、北門は火災に遭い、南門と西門は都市計画によって撤去された。東門（迎曦門）はその中で唯一残された存在である。なお、石材は中国大陸から運び込まれたものが用いられたと伝えられる。

城壁については、1902（明治35）年に東門から南門までの間が取り壊され、これを皮切りに撤去されていった。当時の台湾では治安の維持と衛生事情の改善が急務だったが、城壁の撤去によって取り出された石材が兵營の建設と上下水道の整備に使用された。これは台北城においても同じことが行なわれている。



護城河は緑に包まれ、美しい景観を誇っている。のんびりと散歩を楽しみたい空間である。

なお、迎曦門付近の城壁の跡地には濠が設けられた。この濠の周辺は緑地として整備され、市民の憩いの場となっていた。戦後は無秩序な開発によって、美しさが失われていたが、2000年頃から景観整備が熱心に進められ、現在は「護城河親水公園」と呼ばれる緑地となっている。見事なまでに繁茂した緑が印象的な空間である。

風格を保つ専売局と校長官舎

迎曦門から東門街を東に進むと、民族路との交差点に「臺灣菸酒公司新竹營業所」がある。ここは日本統治時代の専売局で、当時の建物が今も残っている。

この建物を設計したのは台南銀座（現・台南市中正路）や台北市松山の専売局たばこ工場（現・松山文創園區）の設計者である梅澤捨次郎である。竣工は1935（昭和10）年で、翌年5月から使用された。

建物は装飾を排したシンプルな外観だが、よく見ると、表面にはスクラッチタイルが貼られており、水平曲線が緩やかに湾曲した壁面にアクセントを付けている。シンメトリー（左右対称構造）と正面上部に据え付けられた装飾も印象的だ。また、規則正しく並んだ窓も整然とした雰囲気演出している。

ここから東門街を東に進むと、一軒の日本式木造家屋が残っている。ここは日本統治時代に建て



迎曦門は市街地の中心に位置し、新竹駅、新竹市政府、城隍廟がほぼ等距離にある。日本統治時代の様子。



迎曦門の周囲にはロータリーが整備されている。新竹の城門は日本統治時代初期に撤去され、迎曦門だけが姿を留めている。

られた家屋で、旧制新竹中学の校長官舎だった。

詳細な記録は残っていないが、建物は1922(大正11)年頃に竣工したものと推測されている。大正期の官舎によく見られた和洋折衷様式で、畳敷きの和室のほか、板敷きの洋間もあり、家屋の裏手には庭園もある。現在は公共空間となっており、多目的スペースなどが設けられている。

新竹中学は1922(大正11)年に開設された。新竹州下には、ほかに新竹高等女学校があり、実業学校として、新竹商業学校、新竹工業学校、桃園農業学校などがあつた。なお、新竹中学は開校間もない1926(大正15)年に新校舎が完成したため、郊外に移転し、旧校舎に女学校が入ったという経緯をもつ。

戦後、この家屋は新竹高級中学(高等学校に相当)の初代校長・辛志平氏の邸宅となった。1985



日本統治時代の専売局。現在も往時の姿を保っている。



校長官舎は和風建築ならではのたたずまいが色濃く漂っている。床の間なども残されている(東門街32号・月曜と祝日は休館、參觀無料)。

年以降は長らく廃墟のような状態になっていたが、現在は新竹市が管理する史跡となっており、一般公開もされている。

博物館となった常設映画館

迎曦門から中正路を先に進むと、終戦まで「新竹有楽館」という名で親しまれていた常設映画館がある。新竹市を代表する公共空間でもあり、現在は新竹市から史跡の指定を受けている。

ここは映画文化をテーマとする博物館となっている。ホールは往時の姿を保っており、ドキュメンタリー映画などの上映会が随時行なわれている。無料のイベントも多く、市民の評判はおおむね良好な様子だ。

この建物は新竹市によって設けられた最初の公共娯楽施設だった。座席数は560席。収容人数は最大で700余名を誇ったという。新竹市では指折りの大型建築でもあつた。また、全館フルエアコンシステムを採用していたことも特筆される。

竣工は1933(昭和8)年11月15日。総工費は6万円という記録が残っている。鉄筋鉄骨コンクリート構造の2階建てで、建坪は259坪だった。工事依頼は新竹市役所から出されている。設計は台湾総督府営繕課技師の栗山俊一が担当した。

外観はモダニズムを踏襲するシンプルなデザインだ。壁には台北郊外の北投の窯で焼かれたタイルが貼られている。装飾を排した地味な印象だが、これはこの時代によく見られたスタイルである。なお、台湾各地で数々の建築を手がけてきた栗山俊一にとって、ここは台湾総督府技師としての最後の作品となっている。

戦時中は空襲に遭ったが、その後に修復され、戦後は「国民戲院」と名前を変えて営業を続けていた。しかし、施設の老朽化と映画産業の衰退によって閉館に追い込まれる。その後は長らく廃墟となり、無惨な姿を晒していたが、郷土の歴史を見守ってきた史跡として保存しようとする動きが



有楽館は新竹の自慢であった。小さいながらも映画にまつわる文物を展示するスペースがあり、大きな冷房機も残されている。



戦後も映画館となっており、新竹市民なら知らない人はいないとも言われる存在だった。日本統治時代の様子。台湾協会提供。

出てきた。そして、2000年、新竹市影像博物館として整備された。

装いを新たにした建物は、古さを全く感じさせていない。創建からすでに80年あまり。竣工時は時代の最先端を走っていた建物も、今やすっかり町の古参に仲間入りしている。新竹を訪れた際にはぜひ立ち寄ってみたい歴史スポットである。

日本統治時代の新竹の様子

新竹市の骨格は日本統治時代に整えられた。1938(昭和13)年に大規模な都市計画が立てられ、台湾北部を代表する都市として面目を一新した。

市街地は東西南北にそれぞれ東門町、西門町、

南門町、北門町があり、駅周辺が栄町、州庁付近は旭町と呼ばれた。旧市街は城隍廟を中心とした東門町付近だが、日本統治時代に旭町付近が整備され、これが新興開発エリアとなった。ここには官舎群が数多く設けられていた。

東門町は清国統治時代からの繁華街で、城隍廟を中心に発達している。市街地は当初、ここを中心として、南門町と北門町に広がっていた。家屋が密集しており、乾いた風が吹き付けるため、火災が頻繁に起こっていた。そのため、近代的な消防署が設けられた。ここは現在、消防博物館となっている。

駅の裏手は黒金(くろがね)町と呼ばれていた。ここには鉄道部の倉庫群や職員住宅などが並んでいた。ただし、この辺りはここ数年で再開発が進められ、日本式の木造家屋は一掃されてしまった感がある。

新竹公園が設けられた花園(はなぞの)町は昭和時代に入ってから整備されたエリアで、ここには官僚や軍関係者の官舎が並んでいた。

また、市街地の北側には錦(にしき)町、田町(たまち)と呼ばれる地区があった。現在は痕跡を残していないものの、錦町には帝国製糖株式会社の製糖工場があった(昭和15年に大日本製糖



新竹図書館は1925(大正14)年に設けられた。現在は保険会社の所有物となっている。『台湾紹介最新写真集』より。



市政府の後方には、戦時中に竹東方面で開発が期待された天然ガスの研究所も置かれていた。この建物は現在、新竹市の衛生局として使用されている。



旧新竹州庁。新竹を代表する建築物。壮麗なたたずまいに触れてみたい。館内の参観も可能だ。



新竹水源地は市街地の東、十八尖山に設けられていた。竣工は1929(昭和4)年3月。現在も濾過池が保存されているほか、遙拝所の石段やポンプ室が残っている。



官庁舎らしく、重厚な雰囲気漂う。柱や欄干の装飾に注目したいところ。赤煉瓦の壁面と日本風の黒瓦が印象的だ。

に吸収合併されている)。駅と工場の間には専用鉄道も敷設されていた。現在、工場の跡地は「遠東巨城購物中心」というショッピングモールとなっている。

また、軍用飛行場も設けられ、これは現在、中華民国空軍が引き続き使用している。

新竹を代表する官庁建築

迎曦門のロータリーから中正路はやや向きが変わる。ここをさらに進んでいくと、新竹市政府(市役所)がある。日本統治時代に新竹州庁舎として建てられた官庁建築で、1926(大正15)年12月4日に竣工し、翌年から使用されている。

建物は2階建てで、「コ」の字型をしている。こ



日本統治時代に撮影された古写真。新竹州は台湾西北部の広範な地域を管轄していた。『古写真が語る台湾 日本統治時代の50年』(祥伝社)より。

れは日当たりと風通しを考慮した配置であるという。正面に立ってみると、赤煉瓦の落ち着いた色合いが印象的だが、屋根の部分には黒瓦が用いられており、さりげなく東洋的な雰囲気が混じって

いる。

シンメトリーを重視し、荘厳な雰囲気強調するのは戦前の官庁建築に共通した特徴である。当初は正面が2階建てで、その他の部分は平屋となっていた。

1944（昭和19）年の空襲で一部が倒壊したが、現在も現役の官庁舎として使用されている。館内の見学もできるので、ぜひ歴史建築の趣に触れてみたい。

日本時代の市役所は美術館に

新竹市美術館は市が運営する芸術空間である。日本統治時代に新竹市役所として建てられた建築物で、竣工は1930（昭和5）年となっている。

1920（大正9）年に施行された「市街庄制」によって、新竹郡内に「新竹街」が置かれた。ここはその役場として設けられた。その後、1930（昭和5）年に新竹街が新竹市に昇格すると、市役所に改められた。

赤煉瓦造りの2階建てで、シンメトリーが美しい。新竹州庁（現・新竹市政府）と同様、屋根には日本風の黒瓦を用い採光窓が設けられていて、アクセントとなっている。大きな建物ではないが、しっかりとした風格を感じさせる官庁建築である。



小さいながらも存在感を示す公共建築。戦後は戸政管理事務所として使用されていた。



新竹市章「竹」の文字をモチーフにしたものだった。1935（昭和10）年末の新竹市の人口は5万3469名で内地人（日本本土出身者）は5977名だった。『日本都市大観』より。

終戦後は中華民国政府に接収されたが、1991年からは戸政管理事務所として使用されるようになった。そして、2001年には史跡に指定され、行政による保存の対象になった。3年がかりの修復工事を経て、2007年からは多目的スペースとしても機能するようになった。現在は展覧会やイベントなどが随時、開かれている。

「中山路」を進む

新竹市政府（旧新竹州庁）の正面を走るのは中山路と呼ばれる道路である。この一帯は日本統治時代に「表町」と呼ばれていた官庁街だった。

新竹市政府の前には警察署と消防署が道路を挟んで対峙している。新竹警察署の建物は1935（昭和10）年に落成した。当時の警察署建築によく見られたスタイルで、他にも台北南警察署や彰化警察署などで似た建物が見られた。

向かいにある消防署は現在、博物館となっている。先にも述べたように、新竹は強風が吹きつけることで知られ、空気が乾燥する冬場を中心に、火災が頻繁に起こっていた。そのため、消防は日本統治時代初期から非常に重視されていた。



消防署は現在、消防博物館となっており、内部の参観が可能だ。風の強い町なので、火災には万全の体制が敷かれていた。消防に関する展示物のほか、警鐘なども残されている。



新竹市政府の右隣りには新竹市議会がある。その前に置かれているのは旧新竹神社の狛犬である。

建物の竣工は1937（昭和12）年。設計は新竹州営繕課が担った。この建物は装飾とは無縁で、飾りのようなものは一切見られない。中央には市内を見おろせる櫓が設けられ、地上6階分の高さを誇っていた。これは日本統治時代、新竹で最も高い場所でもあった。

同時に、これは日本統治時代の台湾でよく見られた消防署のスタイルだった。昭和期に建てられた各都市の消防署は、似たようなデザインの建物が多い。現在も台南市や雲林県虎尾に日本統治時代の消防署が残っている。

城隍廟と北門街

城隍廟は信仰の中心として賑わう名刹である。その歴史は古く、清国統治時代の1748年に創建されている。廟は絢爛な装飾が施されているが、

一方で、重厚な雰囲気ももっており、独特な風情を漂わせる。

敷地内には数多くの屋台が並んでいる。いつ訪れても熱気に包まれており、新竹を代表するグルメスポットとなっている。新竹名物のビーフン（米粉）や損丸湯など、食べ歩きを存分に楽しめる空間だ。

ここには台湾の伝統芸能である「歌仔戲（こあひー）」の常設舞台がある。運が良ければ観劇も可能だ。この付近には古い家並みが残っており、路地裏探検も楽しい。

旧市街の趣が感じられるのは、城隍廟と迎曦門を結ぶ東門街と新竹中央市場付近で、雑然とした感じはあるものの、活気に満ち溢れている。人々の暮らしぶりを肌で感じられる場所である。

また、城隍廟から伸びる北門街も散策が楽しい。ここは大正時代に整備された家並みが残っており、中国大陸南部に由来する伝統家屋を見ることが出来る。華南地方に特有の亭仔脚（台湾式アーケード）が見られ、赤煉瓦の壁面と建物正面上部に設けられた装飾が印象的だ。

繁華街のような賑やかさはないが、歴史を感じさせる趣深い家並みが続く。老家屋を利用した喫茶店などもあるので、休息を取りながら、散策を楽しんでみたい。肉まんて有名な「黒猫包」もここにある。



城隍廟は1924（大正13）年に改修工事を受けている。精緻な彫刻も見見る価値は高い。毎年旧暦7月15日に盛大な例祭が開かれる。

新竹公園と新竹市立動物園

新竹公園は広大な面積を誇る都市公園である。ここは1919（大正8）年の都市計画によって誕生した。この計画は州庁舎の竣工に合わせた周辺地域の整備と、この公園の開設が二大事業とされていた。

公園は新竹駅の裏手に広がる丘がそのまま敷地となっている。この丘は「枕頭山(ちんとうざん)」と呼ばれ、十八尖山に連なっている。この辺りは終戦まで「花園町」と呼ばれていた。

公園は4年計画で設けられた。敷地内には周遊道路のほか、花壇や池が設けられ、橋を渡すことで景観が整えられた。採掘した土砂は築山に用いられ、この小山は「赤山（せきざん）公園」と呼ばれていた。

なお、開園時から花壇が知られていたが、現在は河津桜が名物となっている。これは日本から贈られたものであり、春先には多くの花見客が押し寄せている。台湾は南方にあるため、日本よりも少し早めの桜が楽しめる。

敷地内には運動場やプール、テニスコートなどもあったが、中でも動物園の存在は広く知られていた。これは1936（昭和11）年6月5日に児童遊園地の付随施設として設けられた。開園後、同月19日にはエチオピアからやってきたライオンが2頭、公開されて話題となった。

児童遊園地は新竹市の市制施行5周年を記念して設けられたもので、当初は台湾随一の規模を目指したものだ。しかし、1935（昭和10）年の新竹・台中州大地震で計画が縮小されてしまった。

新竹・台中州大地震は1935（昭和10）年4月21日午前6時2分17秒に台湾北西部を襲い、死者3276名という甚大な被害を与えた。全壊家屋は1万7907戸におよび、台湾史上最大の惨劇と言われた。新竹州下の苗栗、竹南、大湖の三郡、台中州下の豊原、大甲、東勢の三郡で大きな被害が

出ている。

現在、動物園には日本統治時代の門が残っている。これは一対の門柱の上にライオンが向かい合い、大きな象が来場者を迎えている。

その奥には噴水があり、これも戦前からのものである。さらに、傍らには新竹神社に置かれていた石灯籠が残っている。石灯籠についての経緯は不明だが、戦後の混乱期、ここに運び込まれたものと推測される。また、分解された石灯籠は鹿が飼われている柵の中にも見られる。

最も驚かされるのは日本統治時代の鳥籠が残っていることであろう。これは半球状の大きな鉄籠で、園内に3つ残っている。こういったものが残るのはこの新竹動物園だけで、鳥籠は史跡の扱いを受けている。



動物園には日本統治時代の鳥籠や噴水などが残っている（現在動物園は休園中）。2008年撮影。



ゲートには戦前の門柱が残る。大きな象の彫像が時代を感じさせている。

ここは台湾にある動物園の中では最も長い歴史を誇っている。現在は大がかりな修復工事が進められており、休園中となっているが、今夏に営業再開が予定されている。

日本統治時代の自治会館が博物館に

ここは日本統治時代の建築物を使用した博物館である。新竹の地場産業となっているガラス工芸の紹介がなされているほか、作品やオブジェなどが展示されている。

台湾のガラス工芸は日本統治時代に興ったもので、新竹にも工場が設けられ、主に工業用ガラス製品が製造されていた。戦後は工芸品が多く作られるようになり、この博物館でも数々の作品が展示されている。精緻な細工や製品たちは息を呑むほどの美しさとなっている。

建物は日本統治時代に新竹州自治会館として建てられたもので、竣工は1936（昭和11）年12月25日。新竹に市制が敷かれたのは1930（昭和5）年1月20日のことだったが、これを記念して建設が決まった。費用は新竹州下の自治体から寄付を募り、賄われた。

建物では各種集会が行なわれたほか、来賓の宿泊所にもなっていた。2階にホールや食堂、貴賓室などが設けられ、そのほか、囲碁室やビリヤード場などもあったという。

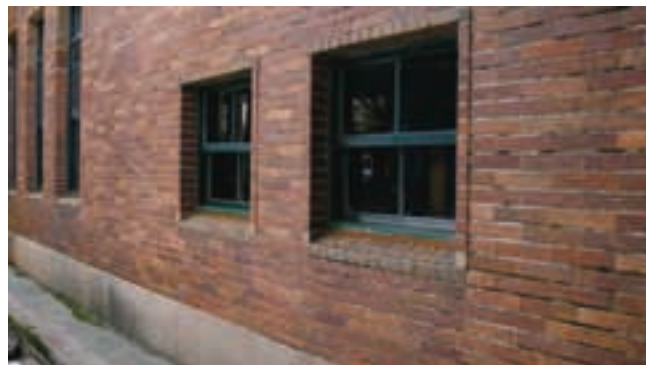
建物は赤煉瓦造りのスタイルからモダニズム建築へ変わる過渡期によく見られたデザインである。シンプルながらもセンスを感じさせる美しい建物は、現在、史跡にも指定され、保存対象となっている。外壁には北投産のスクラッチタイルが貼られ、アクセントとなっている。

玻璃工藝博物館（ガラス工芸博物館）として整備されたのは1999年12月18日。現在は裏手にある4棟の木造家屋も修復され、市民の憩いの場となっている。これらの木造家屋は1930年代に建てられたかつての軍人用官舎である。戦後は中

華民国軍が使用してきたが、その後は長らく廃墟然としていた。現在はこれらの木造家屋も歴史建築として保存対象となっている。



新竹公園の敷地内にある博物館。もともとは共同墓地だった場所が公園として整備された。



壁には意図的に縦型の傷を付けた「スクラッチタイル」が貼られている。



園内には池が設けられている。かつての料亭や軍人官舎だった建物が残されている。

新竹神社跡地に残る日本の黒松

市の南西には新竹神社があった。市街地からは離れていたが、州庁前の道路がそのまま参道になっていた。神苑は広く、台湾屈指の規模を誇った。

日本統治時代、台湾には大小 200 を超える神社が設けられていた。しかし、終戦とともに廃せられ、神苑と施設は中華民国政府に接收された。新竹神社の場合、中国からの不法滞在者や亡命者の収容所になっていた。部外者の立ち入りは厳しく禁じられていたが、敷地内には神苑がほぼ手つかずの状態に残っており、社務所や神楽殿が往時の姿を留めている。

新竹神社は牛埔山に設けられ、1918（大正7）年10月25日に鎮座している。翌々年には県社に昇格。1942（昭和17）年11月25日には国幣小社となった。神苑には社務所のほか、祝詞家や神官宿舎なども設けられていた。

筆者は関係者の好意でこの場所を撮影する機会に恵まれた。現在、拝殿・本殿跡は整地されていて、姿を留めていないが、石畳の部分はしっかりと残っていた。そして、石段を上がり、収容所の建物を抜けると旧本殿跡地の脇に、見事に生い茂った黒松が見えた。これは日本本土から移植されたものとされる。詳細な記録は残っていないが、興味深いところである。なお、現在、新竹市



新竹神社の社務所。神苑は1895（明治28）年8月8日に近衛師団が露営した場所を整備したとされる。1940（昭和15）年10月23日には新社殿が竣工したが、これは現存しない。

の市樹は「黒松」となっている。

新竹神社の遺物とも言うべきものは市内各地に点在している。たとえば、手水鉢や石灯籠は郊外



本殿の跡地に残る黒松。日本から持ち込まれたものである。



新竹神社鳥瞰図。大国魂命、大己貴命、少彦名命、北白川宮能久親王を祀った。



石灯籠や手水鉢は郊外に位置する青草寺・靈隠寺に移設され、保存されている。

の青草湖・靈隠寺に移されている。また、狛犬は新竹市政府横の市議会前に置かれている。さらに、石灯籠の一部は先述した新竹市立動物園の中に移設されている。

博物館の整備に熱心な町

新竹市は歴史建築の保存を精力的に進めており、清国統治時代の古刹をはじめ、日本統治時代に建てられた官庁建築などが保存対象となっている。同時に、こういった建物を博物館とし、市民との接点を設けようとする努力も続けられている。

具体的には、先述した常設映画館「有楽館」（新竹市映像博物館）や、同じく日本統治時代の消防署を整備した新竹市消防博物館、自治会館を整備した玻璃工藝博物館などがある。いずれも歴史建築を有効利用したケースとして注目されている。

そんな中、とりわけ興味深いのが眷村博物館である。「眷村」とは、中華民国軍人が暮らす集落のことで、国民党政府が中国大陸を追われ、台湾に逃げ延びてきた際、下級兵士が一時的に暮らすことを目的に設けられた集落である。多くは簡易住宅や不法に設けられたバラック群で、モルタル造りの平屋で庭はなく、周囲が高い塀に囲まれていることが特色とされる。

これらは簡素を極める建物ではあったが、国民党による一党独裁時代には、あらゆる優遇措置がとられていた。しかし、訪れてみると、無表情な家屋群が、不気味なまでに閉鎖的な雰囲気を出していた。

新竹は日本統治時代に軍事用の飛行場が設けられ、現在も中華民国空軍の飛行場として使用されている。そのため、終戦直後から空軍関係者が多く住むようになった。新竹市内には47の眷村があったとされる。そして、新竹市は総人口の約2割程度が外省籍であると言われ、いわゆる統一派勢力の地盤にもなっている。

眷村博物館は2002年12月28日に開館した。

現在はこういった眷村の文化もまた、台湾史の一部であり、台湾の文化の側面であるという考え方が浸透しつつある。

木造駅舎が残る小さな駅

新竹市の郊外に位置する香山駅は日本統治時代の木造駅舎が今も使用されている。駅が設けられたのは1902（明治35）年8月10日。当初は「香山坑（こうざんこう）」駅を名乗っていた。

現在の駅舎は1927（昭和2）年7月8日に竣工したもので、当時の地方駅によく見られたスタイルである。駅舎は駅務室と駅員の仮眠室、そして待合室で構成されている。建坪は11.14坪と大きくはないが、しっかりと存在感を放っている。

この駅に限らず、日本統治時代に設けられた台湾の木造駅舎は、いずれも扉がない。これは南国特有の疫病や風土病を考慮したもので、風通しが重視された結果である。また、直射日光を避けるため、必ず大きな庇を持っている。これも南国仕様というべきもので、日本本土ではあまり見られない台湾特有のスタイルである。特に昭和初期に台湾各地で見られた駅舎建築のスタイルである。

駅前に商店らしきものはないが、すぐ目の前の幹線道路に出れば、何軒かの店がある。この道路は往来が激しく、古風な木造駅舎には不釣り合いである。その先を進んでいくと、青い海原が広がっている。

以前、新竹在住の古老から興味深いエピソードを教えられた。台湾西部の海は遠浅で知られ、かつては牡蠣の養殖が盛んだったという。しかし、その多くは隣町の竹南産として、台北に送られていた。そのため、香山の名が産地として知られることはなかった。現在は牡蠣の養殖は行われていない。

また、かつて、香山は南隣りの崎頂（きちょう）とともに、海水浴場として知られていた。夏場には海水浴を楽しむ人々が多かったというが、そういった賑わいも過去のものとなっている。



2001年5月31日、駅舎は新竹市から古蹟の指定を受け、行政による保存が決まった。



小さな待合室にも落ち着いた空気が漂っている。駅前を進んでいくと海に出られる。砂地ではスイカの栽培も盛んに行なわれていた。



台湾の西海岸は遠浅が続く。海水浴場は過去のものとなったが、美しい夕陽は今も変わらない。

知られざる日本時代の寺院建築

駅舎の背後には牛の背のようななだらかな山並みが広がっている。その名も牛埔（ぎゅうほ）山。領台当初、日本軍と日本の統治を甘受しない人々が激しく戦火を交えた場所である。

その山腹に日本統治時代に開かれた寺院が残っている。「一善堂」と呼ばれるこの寺院を訪れる人は多くない。知る人も少ないが、往時の姿をしっかりと保っている。

本堂は新竹・台中州大地震で半壊し、1936（昭和11）年に建て直されたものであるという。赤などで塗色されてしまっているため、古色蒼然とした雰囲気ではないが、やはり日本人の目には慣れ親しんだ寺院のスタイルである。傍らには石灯籠の基石なども残っている。

香山駅からは長く続く坂道を上っていく必要があるが、時間があれば訪ねてみたい場所である。



日本式の寺院建築が残る一善堂。本堂は新竹市が指定する史跡となっている。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。武蔵野大学客員教授。早稲田大学教育学部教育学科卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。主著に『古写真が語る台湾 日本統治時代の50年』、『台湾に生きている日本』、共著に『台湾探見-ちょっぴりディープに台湾体験』、台湾生活情報誌『悠遊台湾』など。最新刊は『台北歴史建築探訪～日本が遺した建築遺産』（ウェッジ）。

ウェブサイト台湾特捜百貨 <http://katakura.net/>